

---

# 激闘カスタムロボ

どらどら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

激闘カスタムロボ

### 【Nコード】

N1389Z

### 【作者名】

どらどら

### 【あらすじ】

父と姉の仕事のついでで転向することになった主人公。

主人公は今年で12歳になりカスタムロボをもらった主人公は大喜び。

だったが、その日から主人公は大変なことに巻き込まれていく！

## 日常（前書き）

作者の妄想のかたまりですので、暖かい目で見てください。

## 日常

午前7時5分

ぴゅぴゅぴゅぴゅ

「ふあゝ・・・眠い」

まだ目覚めきっていない目をこすりながら、起き上がるつとしている赤髪ロングヘアの少女の名前は七星<sup>ナナホシ</sup>南<sup>ミナミ</sup>。背は低く容姿は小学6年生にしては整っており、鼻が高く目がパツチリしている。胸は小学生の平均ぐらいである。

感情を表に出すのが苦手で、姉や父につい冷たくなってしまつが内心は2人のことを尊敬している。母に対しては素直に慣れるみたいである。

父七星 聖夜<sup>セイヤ</sup>と姉七星 玉穂<sup>タマホ</sup>がカスタムロボにたずさわる科学者であり2人の仕事上の都合で、最近引っ越しをしたばかりである。

南は眠たそうに着替えをすませると、又ベットに潜り込む。

すると、南の部屋のドアが勢い良く開き玉穂の声が響く。

「おはよー、我が妹よ!」

玉穂は元気よく挨拶すると、南に近づく。

「さあ、いつまでもベットにいないででてきたまえ！」

そう言いながらベットの掛け布団はぎ取る。

掛け布団をはぎ取られた南は、眉間にシワをよせながら玉穂を睨み付ける。

そんなふうに見られて尚も楽しそうにしている。

玉穂は南と10歳ほど離れており、頭はいいがお調子者でイベントごとが大好きで歳が離れていると言っこともあり、つつい南を子ども扱いしてしまいがちになってしまう。

背が高く高校時代は女子バスケット部に所属していた。

容姿は眼鏡を掛けており南と同じで整っている、髪型は赤髪ツインテールで胸は発達しておりDはあるらしい。

「さあ、我が妹よ母と父がお腹をすかして待っているぞ」

「うるさい、言われなくてもわかっている……」

「あは、ご機嫌ななめだねえ〜我が妹よ」

玉穂の言葉にさらにイラつきながら返す南。

「その呼び方やめろ……イライラする」

「はいはい、わかったよ我が妹よそれより父が何か渡したいものが

あるらしいよだから早くおりてきなよ」

そう言うと玉穂は楽しそうに部屋を出ていく。

南はその後ろ姿を見送ると、舌打ちをしながら後に続き一階のリビングに降りていったのだ。

リビングにて

「おはよう南、よく眠れたかしら？」

リビングに降りると、母の奈美恵ナミエが話し掛けてくる。

「お早よう母さん、よく眠れたよ」

玉穂に対しての態度と違い、普通に挨拶を返す南。

「それは、何よりだな南」

「うん、そうだね父さん・・・」

父聖夜に対しては少し無愛想に返事を返す。

「それより、今日は南に渡したいものがあるんだ」

父聖夜はそういうと懐から箱を取出し、南に渡す。

「何これ？あけていいの？」

少しうれしそうな顔をしながら父に尋ねる南。

「ああ、いいよそのためのものだからな」

南に対しほほ笑みながら言い返す聖夜。

それを聞き急いで開ける南。

なかを開けると・・・ノートが入っていた。

それを無言でとると・・・

「なんでだよ！！嫌がらせか！！」

と怒鳴り父の顔に投げ付けた。

「ぐはっ！！じよ、冗談だ本当はこっちだ・・・」

そう言いながら、もう一つの箱をわたした。

それを南は今度こそと思いながら、開けた。

中には一体のカスタムロボットと、その他のものが入っていた。

「これってカスタムロボ・・・、いいの？」

うれしそうにそう尋ねる南に対し聖夜は顔をさすりながら、返事する。

「ああ、いいさおまえも今年で12歳になるカスタムロボをもいい歳だしな」

それを聞き今度は母の方に顔を向ける。

それに気付き、母ほほ笑みながらいう。

「ふふ、大丈夫私も同意してるから」

すると、南はうれしそうにカスタムロボを胸に抱き寄せる。

「あり、がとう」

「いやいや、因みにそいつシャイニングファイター型のレイ<sup>マーク</sup>MK1  
1だ、中にそいつを入れるガレージに武器それとケータイがある大  
事にしろよ」「さあ、渡すもんも渡したようだしさっさと食べよう  
よ」

話を終わるまで待っていた玉穂がそう言うと、父と母席に座りそれ  
に続き南も座る。

「ではでは、皆さん手をあわせていただきます！」

「」「」「いただきます」「」

こうして、七星家のいつもの日常がまく開けたのだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1389z/>

---

激闘カスタムロボ

2011年12月4日23時54分発行